

I 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていきます。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	○	○	●	○	○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

プライバシー侵害の問題のなかでより一般的なのは、モデル小説よりもゴシップ記事^(a)である。それはモデル小説よりもはるかに直接的に、しかも意図的に特定の個人のイメージをつくりだす。そして、記事によって公表された個人のイメージは、広く人びとに認知されることで、個人にとってのいわば付加的な社会的自己^(b)がつくりだされて流布していく。

ところで、ゴシップ記事と社会のうわさとは、一見似ているように思えるために、あたかもゴシップ記事は、うわさと同質のものと考えられがちである。だが、うわさは昔からあるものだが、プライバシー侵害のような問題は生じてこなかった。一方、ゴシップ記事の方は、いうまでもなくプライバシー侵害と切っても切れない関係にある。

では両者の違いははたしてどこにあるのか。この違いは、プライバシー論でもしばしば取り上げられてきた。情報が広まる範囲の大きさの違いや、うわさの主体とそれを流す側との相互依存関係などといったことも指摘されたが、どうもそれだけではすっきりしない。ここにプライバシーという問題の特質が見られる。

そもそも伝統的なうわさ話には二種類のものがあつたとヘレン・M・ヒューズはいう。一つは自分たちの村や親戚、知り合いの人間関係のなかでのお互いのうわさ話であり、もう一つは、どこかには実在する人物についての情報ではあるが、他の共同体の英雄や祖先についての英雄伝のような、なかば神話的なお話(バラッド)である。そして両者は情報の性格がまったく異なっている。

前者は、一定の集団内部の具体的で実質的な互いの人間関係や利害得失とカラんでいる。たとえば、知り合いの冠婚葬祭の情報は、人びとにそれに対応した行動を起こさせる。あるいは、上司が社長と険悪な関係になったとか、社内のスキャンダルのうわさは、組織内にいる人びとのその後の実際の関係や行動に影響を及ぼす。この種の情報がうわさである。ところがバラッドは単なるお話であり、ある人物を物語ることそのものが目的になつ

ている。

ゴシップ記事はこのどちらに近いかといえば、明らかにバラッドに近い。それに書かれるタレントや政治家、俳優、歌手、スポーツ選手といった人びとの話はいずれも、読者の利害や人間関係とは直接は関係ない。かつて大阪府知事の黒田一は「マス・コミは若き日の恋はもとより、私すらも知らぬ二八代前の先祖にまでさかのぼって記事にするし、小学校時代の各課目の成績まで公けにしまった。私がネコを愛し、こけしを愛し、パチンコを好み、タコ焼き・どて焼きを好み、囲碁・将棋など勝負事が好きなことは、みんなバレてしまった」といつていたが、これらは元知事の政治家としての評価とはまったく関係がない。

あるいは村上直之は、交通事故と犯罪とを比較して、前者の方がその被害者の数や影響力からいつてもはるかにジンダイであるにもかかわらず、犯罪の方がいつも大きく取り上げられることにふれて、「^(注4)ニユースの価値は、そう信じられているように、それが伝達する出来事の情報の稀少性にあるわけではない。それはまた、その情報の実利的な効用、いわゆる使用価値にあるわけでもない」という。まさにそのとおりだろう。村上は、犯罪ニュースとは「a 善 b 悪の象徴劇の世界にほかならないのだ」という。つまり交通事故よりも犯罪の方が、一般に物語的价值が大きいがゆえに取り上げられ方も大きくなることが多いのである。

ヒューズは、ゴシップ記事やそれに類する物語的性格の強い報道は、ジャンルとしてはむしろ「ポピュラー文学に近い」とし、それらを「人間的な関心の物語」と呼んだ。それは小説を読んだり映画を見たりして、その物語の主人公の運命はこの先どうなるのか、あるいはその人物の真実とは何かを知りたいと思うような性格の関心だということだ。つまり、うわさが人びとの一定の利害関心にかかわる情報伝達だとすれば、ゴシップ記事は、それが描く個人への物語の関心に応じるものである。ヒューズがいうように、ゴシップ記事がバラッドの延長線上にあるとすれば、うわさもバラッドに近づくとき、そこからプライバシー問題が生じてくるともいえるだろう。自分たちになまったく関係がない情報でも、それを知られたがる読者や観客が生まれるのは、自らの利害とは無関係なその人物そのものへの好奇心による。うわさが、ある個人についての実質的利害にからむ情報（これをヒュ

ーズはニュースと呼んでいる)であるのに対し、ゴシップ記事とは個人を題材にした人間ドラマのファンタジーである。だからゴシップ記事に書かれる個人は、その時点である物語のなかの登場人物として再構成され、人びとの人間的な関心の対象として見られるようになる。

したがって、プライバシー侵害が問題化しなかったようなわざとバラッドやゴシップ記事との違いとは、⁽³⁾個人のダブルを構成することの意図や目的性にある。バラッドやゴシップ記事は情報そのものの性質が物語的なのである。そしてプライバシー問題が、うわさからではなく近代のゴシップ記事から生じてきたとすれば、プライバシーとは情報それ自体の問題というよりは物語的情報の問題、つまり個人のダブル構成の問題だということなのである。

バラッドの場合、今日の歴史小説と同様、書かれた本人がそのダブルと出合うことはまずない。^(c)物語る人びと^(d)と物語られる人びととのあいだには接触はない。だからバラッドのようなものからは問題は生じない。一方、ゴシップ記事やモデル小説の場合、物語化された個人は、世間に流布された自らのダブルとぶつかり合う。物語の作り手や語り手と対象になる本人とは同じ世界の住人だからだ。その結果、プライバシー侵害の問題が生じてくる。

重要なことは、プライバシーが個人の情報よりも物語化とかかわってきたことであり、この物語化とは個人のダブルの構成にほかならない。単なるうわさやニュースはダブルを構成しないことも多い。あるいは少なくともダブルの構成そのものが目的ではない。うわさは、対象となる人間そのものを知ることが直接の目的ではないからだ。だが物語的関心はそうではない。何らかの物語がつけられ、特定の個人をその登場人物として描き出す。するとその登場人物そのものが関心の対象になる。そしてプライバシー問題が生じてくるのは、明らかに後者からである。プライバシー問題は、単なる情報からは生じない。それによって個人のダブルが構成されるとき、はじめて生じてくるものである。

逆からいえば、^(e)個人情報が用いられたとしても、それが何らかのかたちでその個人のダブルの構成とかかわら

ない限り、プライバシーの問題は生じてこない。反対に、それがダブルの構成とかわる可能性が生まれてくる
とき、この問題が生じてくる。そのため、古くからあるうわさはプライバシーが問題化しなかったのに対し、ゴ
シップ記事はそうではないのである。

(阪本俊生『ポスト・プライバシー』による)

(注) 1 ヘレン・M・ヒューズ——カナダ出身の社会学者(一九〇三—一九九二)。

2 黒田了二「公人とプライバシー」からの引用。

3 村上直之「日本の社会学者(一九四五—二〇一四)」。

4 村上直之「犯罪報道の社会史?——犯罪報道の社会的機能とは何か」からの引用。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(1)について。その本文中の説明として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 二種類のうわさは情報の性格自体において異なる。

- 2 知り合い等の人間関係内での互いのうわさはポピュラー文学に近い。

- 3 祖先の英雄伝のようなお話は人々の利害得失と関わりなく語られる。

- 4 知り合い等の人間関係内での互いのうわさはモデル小説に近い。

- 5 祖先の英雄伝のようなお話は希少性があるため盛んに語られる。

(C) 線部(2)について。なぜこのような事態が生じたのか。筆者の考える理由として最も適当なもの一つを、
左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 黒田は知事としてのリーダーシップから、大阪において英雄的人気を誇っていたから。

- 2 大阪府知事という公人にプライバシーは認められないという考えが一般的だったから。
 - 3 黒田の恋愛経験や嗜好等の情報は、大阪府民の利害に関わるものであったから。
 - 4 黒田は、あたかも物語の登場人物のように人びとの好奇心の的となっていたから。
 - 5 黒田の人物を事細かく取材することで自らの評価が高まると、報道機関が考えたから。
- (D) 空欄

a

・

b

にそれぞれ漢字一字を補い、四字熟語を完成させよ。(ただし、楷書かいしょで記すこと)
- (E) 線部(3)について。文中の……線部(a)～(e)のうち、「個人のダブル」の言い換えとして最も適当な語句一つを選び、記号で答えよ。
- (F) 本文中の「バラッド」と「ゴシップ記事」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。
- 1 バラッドは物語化された個人を生み出さないのに対して、ゴシップ記事はそれを生み出す。
 - 2 バラッドとゴシップ記事は、いずれもプライバシー侵害の問題を引き起こしがちである。
 - 3 バラッドは特定の集団内の人びとの行動に影響を及ぼすが、ゴシップ記事は影響しない。
 - 4 バラッドは人びとの物語的関心を呼び起こすが、ゴシップ記事は単なる個人情報に過ぎない。
 - 5 バラッドでは語り手と登場人物の接触はまず問題化しないが、ゴシップ記事では問題になる。
- (G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 仲間内でのうわさが個人のダブルを生むことはありえない。
 - ロ 個人への物語的関心が生じるとプライバシー侵害が生じうる。
 - ハ 交通事故は人びとの実質的利害に関わるため犯罪より大きく報道される。
 - ニ ファンタジーでは物語の対象と語り手は同じ世界の住人ではない。
 - ホ プライバシー侵害は個人とその流布された像が接触する場合に生じる。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

文章を書く際に、文末をどのように結ぶか、というのは常に大きな悩みの種である。誰でも一度は、書いた文章を少し醒めた目で読み返し、「〜である」がやたらに乱発されているのに気がついて、「何を偉そうに……」という違和感を覚え、「気恥ずかしさにいたたまれない」という経験があるのではないだろうか。

おそらく原因は文章が未熟だから、ということだけにあるのではないだろう。そこには書き手の判断をどのよう、あるいはどこまで打ち出していくかをめぐる、現代日本語の宿命的な困難が潜^(a)んでいるように思われるのである。

たとえば「〜なのである」「〜なのだ」という断定を「〜と思われる」「〜と考えられる」などに置き換えてみると「気恥ずかしさ」が多少とも減じるような気がするのなぜなのだろう。自分の見解が一般的な妥当性を持っているかのようによそおうことができ、ひとまず安心するからなのだろうか。あるいはその背後では、主観的な判断と客観的な妥当性との間にいかに折り合いをつけるかをめぐる、ギリギリの駆け引きが展開されているのではあるまいか。おそらくそこで問われているのは、たしかにあるはずの「私」の判断を、あたかもない「かのように」よそおってみせるしたたかな技術なのである。

古文ならば「なり」「たり」あるいは「候」^(b)という定型表現で解決していたはずのこの問題は、近代になってなまじ「言(話し言葉)」と「文(書き言葉)」とを一致させようという改革が始まってしまったために、あたかもパンドラの箱を開けたように、一気に表に吹き出してしまった観がある。「〜である」を段落の最後の文章だけに使ってみたり、動詞の終止形を織り交ぜてみたり、体言止めを取り入れてみたり、おそらくわれわれは「偉そうに」見えてしまう突出——「私」の判断の露骨な表出——を避けるために、今後もさまざまな試行錯誤を繰り返していくにちがいない。この問題に関してはいまだ大方の合意があるわけではなく、長い歴史で見れば、「言^(注1)文一致体」はまだ形成過程にある、はなはだ不安定な文体なのである。

以下本題に入ろう。

実は右の事情は言文一致体でどのように小説をつくっていくか、という近代小説の問題にほぼそのままスライドさせて考えてみることができる。実際には叙述主体である「私」はたしかにあるのだけでも、物語を効果的に演出していくために、あたかもそれが「かのように」操作する必要にせまられることもある。近代小説をこうした「私」を隠す、あるいは巧妙に打ち出していくための技術の歴史としてナガメた時、⁽¹⁾はたしてどのような風景が見えてくるだろうか。⁽²⁾

夏目漱石の『三四郎』を例に考えてみることにしよう。この小説は漱石が職業作家としてスタートをきってまだ間もない、初期の名作として親しまれている。主人公の三四郎は熊本から上京して帝大に入学するのだが、見るもの聞くものが目新しい東京の風景に圧倒されてしまう。たとえば次のように……。

三四郎が東京で驚いたものは沢山ある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴る間に、非常に多くの人間が乗ったり降ったりするので驚いた。次に丸の内でも驚いた。尤も驚いたのは、どこまで行っても東京がなくならないという事であった。しかもどこをどう歩いても、材木が放り出してある、石が積んである、新しい家が往来から二、三間引込んである、古い蔵が半分取崩されて心細く前の方に残っている。凡ての物が破壊されつつあるように見える。そうして凡ての物がまた同時に建設されつつあるように見える。大変な動き方である。

三四郎は全く驚いた。要するに普通の田舎者が始めて都の真中に立つて驚くと同じ程度に、また同じ性質において大に驚いてしまった。

(二の一)

右の文章から、まず文末表現だけを拾い上げてみることにしよう。「た」で結ばれている場合と、動詞の現在形で終わっている場合とがほぼ半々に入り交じっていることに気がつく。一般的に、「た」は過去のできごとで

あることを示す文末表現だが、それだと過去のできごとと現在のできごとが同時に交錯していることになるので、はなはだおかしなことになってしまう。しかしわれわれはさしてそれを不自然には感じない。つまり「三四郎は」大に驚いてしまった」という場合の「た」は過去のできごととしてよりもむしろ、語り手が三四郎の視点を離れて彼を外側から観察し、概括的に説明する三人称的な表現であることのシグナルと見るべきなのだろう。それに對し、「放り出してある」「積んである」「ように見える」といった動詞の言い切りの形は、三四郎にとって東京がどのように見えるのか、という、いわば彼に寄り添った一人称的な視点であると言ってよい。この二つの視点を交互に織り交ぜ、立体的に構成してみせている点に作者の創意と工夫があるわけである。

この問題はミニチュアのドールハウスやジオラマを例に考えてみると、よりわかりやすくなるかもしれない。

町や村のミニチュア模型を見る楽しさは、世界をトータルに所有してみたいというわれわれのうちなる欲望に発している。上から立ってナガめると学校や病院の配置を一望できるのだが、それはいわば **a** に表される統括的な、**b** 的な視点である。それに対して見る側ががみ込んで、人形の二つ（二人）になったつもりで広場から時計台を見上げてみる楽しみもあるだろう。それはいわば **c** に代表される、現場の **d** 的な視点であると言ってよい。この二つの視点を自由に織り交ぜることによって、われわれは初めて一個の世界をトータルに所有し得たと感じるわけである。

三人称的な視点と一人称的な視点と——おそらくはこの両者をいかに組み合わせるかに言文一致体の『小説づくり』のポイントがあった。そしてこの場合、要点の一つは文末詞の「た」をいかにうまく使いこなすか、にあると言ってよい。

たとえばこの点に関して野口武彦は、^(注2) 日本文学にもとまなかったはずの三人称の概念が近代小説に定着していくプロセスとして、標識記号としての「た」を興味深く論じている（『三人称の発見まで』）。実は谷崎潤一郎が『現代口語文の欠点について』という文章の中で、文末の「た」に思わず「のである」を書き加えてしまいたくなる書き手の心理を問題にしているのだが、野口はこれを取り上げ、そこには三人称と一人称との間の「或

る微妙な、いわば危険な関係」があるのだという。たとえば他者の心理を「嬉しかった」と表現すると、なぜそこまで客観的に断定できるのか、という不自然さを打ち消すことができない。そこに話し手の判断として「のである」を付け加えたくなってしまうのは、一般的な妥当性と話者の判断とのギリギリのせめぎ合いがあるからなのであって、それを野口は客観世界に主観が介入しかねない、「危険な関係」だというのである。「嬉しかったのである」という表現は、この場合、三人称的な事実の提示と一人称的な判断とのせめぎ合いの産物としてあるわけである。

こうした例から浮かび上がってくるのは、日本の近代小説においては、「した」にヒヨウシヨウされる「かつて——そこに——あった」世界を提示する視点が不可欠だが、同時にそれだけで作中世界を構成することはできず、背後でそれを読み手に伝えている叙述主体——隠れた「私」——の判断が同時に求められることになるという、はなはだ興味深い事実なのである。

(安藤宏『「私」をつくる——近代小説の試み——による)

(注) 1 言文一致体——話し言葉と書き言葉を一致させ、話し言葉に近い口語体を用いて文章を書く方法。

2 野口武彦——文芸評論家、国文学者(一九三七)。

問

- (A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)
- (B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部について。その意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 可哀そうでない
 - 2 痛くて仕方ない
 - 3 悲しくて仕方ない

- 4 その場にいられない 5 悔やみきれない

(D) —— 線部(1)について。「右の事情」とはどのようなものか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 書いた文章を読み返して「〜である」が多く、違和感を覚えるのは文章が未熟だからであること
- 2 文末表現で、書き手の主観的な判断と客観的な妥当性との間に折り合いをつけるには困難を伴うこと
- 3 古文ならば、文末表現をめぐる問題は、「なり」などの定型表現で解決していたはずであること
- 4 近代になって「話し言葉」と「書き言葉」とを一致させようとする改革が始まってしまったこと
- 5 言文一致体は未解決の問題を抱えており、まだ形成過程にある、はなはだ不安定な文体であること

(E) —— 線部(2)について。ここから見えてくる風景が表す説明として適当でないもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 『三四郎』において、文末が「〜た」で結ばれている場合と動詞の言い切りの形で結ばれている場合とが入り混じって表記されている。
- 2 『三四郎』において、三人称的な視点を巧妙に用いて、三四郎が東京の街中で驚きながら見た風景がいきいきと描き出されている。
- 3 『三四郎』において、漱石は、三人称的な視点と一人称的な視点とを交互に織り交ぜ、立体的に構成してみせている。
- 4 文末詞の「〜た」をいかにうまく使いこなすかが、言文一致体の「小説づくり」における要点の一つになっている。
- 5 事実の提示と判断とのギリギリのせめぎ合いがあるので、「〜た」のあとに「〜のである」を付け加えたくなることがある。

(F) —— 線部(3)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

あれば後者に重きをおくこともある。

ハ 古文ならば「なり」「たり」あるいは「候」という表現を用いることによって客観的な妥当性が示されていた。

ニ 「放り出してある」「積んである」「ように見える」といった動詞の言い切りの形は、三四郎が見ている風景を一人称的に表現している。

ホ 三人称と一人称との間のギリギリのせめぎ合いを野口が「危険な関係」といったのは、作中世界での一般的な妥当性に話者の判断が介入しかねないためである。

三 左の文章は、藤原道長が亡くなった後のことについて語られている一節である。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

御堂に、宮々、殿ばら、あはれに聞こえさせたまふに、十日の夜、中宮の御夢に、いと若くをかしげなる僧の、いとあてやかに装束きたるが、立文を持って参りて、「これ」と申せば、「いづくよりぞ」とあれば、「殿の御文」と申せば、喜びて御覧するに、下品下生になんあるとはべる御消息なれば、宮の御前、「いと思はずに。」さやは」とのたまはせければ、この僧「いかでか。かうまでもおぼろけのことにはさぶらはぬものを」と申すと御覧じければ、殿ばら、「きは往生させたまへるにこそ」と、「あはれ、この御堂のことを夜昼の御宮みに心にかけてさせたまひ、また念誦の最後あるべきかぎりおはしましたるに、いみじううれしきかな」と思しのためはする。三井の入道中将の、念仏をせちに勧めきこゆ。「みづからもせしに、眠りたりしかば、いと心地よげなる御けしきにて、『下品といふとも足んぬべし』といふことを、かへすがへすのたまふと見しかば、功德の相なめりと思ひて、人にも聞こえてやみにしを、この御夢に聞き合はするになん、いと頼もしうなりぬべき」とぞ聞こえたまひける。

また二三日ばかりかねて、永昭僧都・融碩などが、御枕上にて御念仏しければ、融碩の夢に、九体の中台の御左の方の脇よりいとうつくしき小法師の出で来て、香炉を持って来て、殿の御前の御枕上に置きつと見て覚めにけり。その夢はまだおはしましたしをり、人々にみな語りけり。往生の記などには、人の終りの有様、夢などこそは、聞きおきて往生と定めたれ。往生させたまへりと見えたり。「まづうせたまひし有様、御腰より上は温まらせたまひて、御念仏極まりなくさせさせたまひしに、功德の相しるく見えさせたまひにきかし」などのたまひ定めさせたまふ。法華経をいみじく帰依したてまつらせたまひければ、現世安穩・後生善所と見えさせたまふぞ、世になくめでたきや。

〔栄花物語〕による

(注) 1 宮々——宮の方々。ここでは、道長の娘たちを指す。

2 殿ばら——道長の子息たち。

3 中宮——道長の娘である威子。

4 立文——正式な書状の形式のこと。

5 下品下生——『観無量寿経』に説かれた往生の九段階の最下位。

6 三井の入道中将——源成信。道長の養子。

7 永昭僧都——興福寺権別当で、説教の名人として知られた。

8 融碩——興福寺の僧。

9 九体の中台——阿弥陀堂にある九体の阿弥陀仏のうち、中央に位置するもの。

問

(A) ——線部(1)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 残念なことよと申し上げさせなさっている

2 気の毒なことよと申し上げさせなさっている

3 慕わしいことよと申し上げていらっしゃる

4 心打たれることよと申し上げていらっしゃる

5 尊くありがたいと申し上げていらっしゃる

(B) ——線部(2)について。中宮が見た夢の内容について述べた部分はどこまでか。その箇所を本文中から探し出し、終わりの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。

(C) ——線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

2 道長が生前の功德に依じて往生をとげること

3 道長が生前に多くの功德を積む必要があったこと

4 藤原氏一族が道長の死後も引き続き繁栄していくこと

5 道長のために子供たちが法華経をより深く信奉すべきこと

(K) 線部(II)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 前兆として現れなされたことよ

2 知れわたっていらつしやることよ

3 はつきりとお見えであられたことよ

4 当然のようにお感じになられたことよ

5 それとなく私たちにお示しになられたことよ

(L) 線部(I)(II)はそれぞれ誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で

答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 宮々・殿ばら

2 僧

3 殿(藤原道長)

4 三井の入道中将

5 永昭僧都

6 融碩

(M) 線部(a)(c)の文法的説明として最も適当なものを、左記各項の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 完了の助動詞「ぬ」

2 打消しの助動詞「ず」

3 断定の助動詞「なり」

4 動詞の一部

〔以下余白〕

